

# 先輩たちがつくれていかなくてはならないものと。

『テレビ番組をつくる人』若手テレビマンへのインタビューシリーズ。前回の回では、古立ティレクターに続く今回は、「TBSの中島啓介」「一矢」。次世代ビジネス企画室という部署に所属しながら、「リアル脱出ゲームTV」という今までない新しいスペシャル番組を制作した、いま注目株の若手テレビマンに話をうかがってみました。



今月の**G**な人

株式会社 TBS ホールディングス  
次世代ビジネス企画室・プロデューサー

## 中島 啓介さん

なかじま・けいすけ／番組プロデューサー  
2009年の入局後、バラエティ番組のADを経て2012年に次世代ビジネス企画室へ異動。以降「リアル脱出ゲームTV」「ジンロリアン～人狼～」などを企画・プロデュース。セカンドスクリーンとテレビとを連動させた新たなテレビ体験の開発を目指す。

なかじま・けいすけ／番組プロデューサー  
はい。感覚を共有するのが、たいへんでしたね。  
そらく、最後まで、中島はよくわからない奴と思  
われていたと思います(笑)。少し話はそれますが、  
僕らがテレビ番組を検索するとき、Gガイド等の電  
子番組表を使うのが主流じゃないですか。でも、こ  
う仕事をミッションとする部署に所属している中  
島さんが、『リアル脱出ゲームTV』という番組を手  
がけることになった経緯を教えていただけますか。

今年9月に発刊した弊社の編著『テレビ番組をつ  
くる人』(PHPパブリッシング)の中で、TBSの  
合田隆信さんが、『リアル脱出ゲームTV』のことを  
褒めていましたよね。あの番組はソーシャルメ  
ディアを活用して成功した番組だけれども、「ソ  
ーシャルメディアを活用した番組をつくる」とした  
のではなく、「面白い番組をつくる」がベースに  
あったからこそ成功したのだ。

本日はお忙しいなか興味深いお話をいただき、  
ありがとうございました。

聞き手・文／横江史義



イベントとネットとテレビを相乗的に繋げてい  
くというおそらく今までの番組づくりの考え方には  
はなかつた発想ですね。それでも、企画を提案し  
てから割とトントンと進んだということは、中島さ  
んの提案に対する理解が比較的スマートに得られ  
たということなのでしょうか。

いいえ、違います。みんな、「よくわからない。け  
ど、とりあえずやってみよう」という感じでした。は  
たしてこういう番組が数字がとれるのかとれない  
のか、まったくわからないでも、もしかしたらどれ  
るかも知れない。しかも、それが若い社員の手がけ  
た番組ということになると、尚更にいいの  
だから、とにかくやってみよう……と制作だけで  
はなく、編成もそういう考え方をしていただきまし  
て、今年の元旦夜という枠で放映することにな  
りました。深夜とはいえ、おめでたいお正月に、まつ  
たくおめでたくない(リストが爆弾を仕掛ける  
という笑)番組を流すわけですから、チャレンジ  
なことだったにちがいありません。そこは、TBS  
Sという局の社風があったからこそ実現できた番  
組などと思ってます。

今まで実績をつくれってきたテレビ局の先輩たち  
は、迫力のある人たちが多いですから、そこをい  
や、若者的には「と切り返していくのは、実際はなか  
なか勇気のことだと思います。でも、そうやっ  
て中島さんのような果敢な若手がどんどん出てこ  
ないと、テレビ局も世代交代していきませんよね。

先輩たちがつくってきたことは、すごいと思いま  
す。純粋に尊敬します。でも、僕らの世代は、先輩た  
ちとはまったく違う環境前提の中でテレビ番組を  
つくっていくなくてはいけません。HUITがどんど  
ん下がっている中で、どうやって稼ぎづけていけ  
ばいいのか。将来どおり視聴率を追いかけていつ  
て、未来はあるのか。スポットという概念 자체、いざ  
れなくなってしまうかもしれない……等々、いろい  
ろ考えます。やはやテレビ黄金時代をつくってきた  
先輩たちがつくってきたから、まだものに乗つ  
かっていくだけでは未来は拓けない状況にきて  
ます。僕らは僕らの力で未来を切り拓いていかなく  
てはいけません。だから、やっぱり「いや、若者的に  
は……」と主張すべきだと思うんです。そういうぶ  
つかり合いの中で、お互いの良い部分を落とし込む  
ことができれば、新しいものが生まれ、結果として  
よい世代交代が行われていくのではないかと感じ  
ます。

大切なのは、「没入感」なのだとと思っています。  
うすれば、若者が「没入させる」ことができるか、  
という。若者がテレビを見なくなつたのは、テレビ  
がつまらなくなつたわけではなく、「テレビ」に「没頭  
すること」しなくなつたということなんだと思います。  
だから、「めり込む」仕掛けをつくりあげ  
ればいいです。やはり、メディアとしてのテレビ  
の力は絶大ですから、何かに没入していく「きっかけ」  
として「テレビ」という箱を最大利用すればよいわ  
けでして『リアル脱出ゲームTV』は、そういう形  
になっていますし、今月のクリスマスイヴに放  
映予定の「マッチング・ラブ」という番組も、そ  
う仕掛けを意図してつくりました。「マッチング・  
ラブ」は、理想の相手を探し求める恋愛ドラマなの  
ですが、その番組放映中に、視聴者同士が理想の  
カップルとして結ばれるかもしれない……そんな  
ドラマです。ドラマの出来事を、単なるテレビとい  
うフィクションの出来事で完結させるのではなく、  
リアルな世界でも疑似体験が生みだしていくとい  
う仕掛けをつくることで、視聴者を「没頭」させてい  
くことができるかも知れない。そんなことを考えな  
がら、番組をつくりています。

合田さんは、そのとおりなので、僕たちが番組をつくる  
際の第一条は、まずセカンドスクリーントークに  
参加しない人も楽しむことができる番組をつくる  
ことです。その上で、運動を楽しむ特に「若い世代」  
にも見てもらえるようなコンテンツがつくれれば、スポン  
サーもおのずとついてくると思っています。ただ、  
番組づくりの根本はとにかく「誰から見ても面白  
いもの」をつくることだと思っています。

いま、テレビ離れが進んでいる若者を、「テレビを  
きつかけに盛り上げる」というのは、かなり難しいこ  
とですね。